

自閉症児と知的障害児における明るさ補完の比較

吉本 美穂
宮谷 真人

似島学園
広島大学大学院教育学研究科

When a child has both mild intellectual disability (ID) and mild autism spectrum disorder (ASD), it may sometimes occur that ASD are not perceived and he/she could not accept appropriate and necessary support in the field of welfare or teaching. A better understanding of nature and causes of the differences in visual information processing between ASD and ID will help to give more appropriate support to ASD children. In the present study, we examined lightness filling-in on illusory contour figures in three groups, ASD children without ID, ID children without ASD and typically developing (TD) children. Results showed that ID children without ASD filled lightness on illusory contour figures to the same degree as TD children did, though ASD children without ID hardly filled it on them. The present study suggests the possibility to find out unnoticed ASD in ID children who have perseveration or difficulties of verbal expression.

Keywords: lightness filling-in, autism spectrum disorder, intellectual disability.

問題・目的

発達障害には自閉症スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorders, ASD), 知的障害 (Intellectual Disability, ID), 学習障害, 注意欠陥/多動性障害, などがある。ASDには, 社会性 (対人関係)・コミュニケーション能力・想像力などの発達の遅れや偏り, 固執性などの特徴がある。近年, ASDにおける視知覚・視覚認知に関する研究が進められている。Happé (1996) は, ASDのある子どもはASDのない子どもよりも錯視が生じにくいと主張した。しかし, Ropar & Mitchell (1999) は, ASDのある子どもはASDのない子どもと同程度の錯視が生じることを示し, Happé (1996) の実験の手続き上の問題を指摘した。また, Milne & Scope (2008) も, ASDのある子どもはASDのない子どもと同程度にKanizsa型主観的輪郭を知覚すると主張している。

一方, 福祉や教育の現場では軽度のIDと軽度のASDがある場合, ASDが見過ごされ, ASDの特徴に配慮した対応がなされない場合がある。もし, ASDとIDの視覚情報処理に何らかの違いが認められるならば, その違いの内容や原因を正しく把握することが, ASDのある子どもたちにより適切な支援を行う一助になるものと考えられる。

以上のことから, ASDのある子どもはASDのない子どもと同じように主観的輪郭図形において明るさの補完を行うのかどうかを検討するとともに, IDのないASDの子どもと, ASDはないが軽度のIDのある子どもにおけるKanizsa型主観的輪郭の明るさの補完について比較検討することとする。

方法

実験参加者

児童精神科医師によってASDと診断されている子ども13名 (男子11名, 女子2名, 年齢: 11-15歳, WISC-IIIの平均はFIQ=97.1, VIQ=97.8, PIQ=96.8), IDのあ

る子どもおよび知的に境界域の子ども12名 (男子7名, 女子5名, 年齢: 11-15歳, 12名のうち10名のWISC-IIIの平均はFIQ=67.9, VIQ=71.9, PIQ=70.6, WISC-IIIを実施していない2名の田中ビネーの平均はIQ68), そしてTD群としてASDおよびIDのない子ども13名 (男子10名, 女子3名, 年齢: 11-15歳, WISC-IIIの平均はFIQ=98.2, VIQ=96.8, PIQ=100.5) が実験に参加した。

刺激

Kanizsa型主観的輪郭図形を使用した (Figure 1)。一辺 60 mm の正方形の中心に, 一辺 30 mm の正方形 (検査野: Test Field, TF) が形成されるように, 直径 20 mm のディスク型の誘導野 (Inducing Fields, IF) を配置した。なお, 背景は TF と同じ明度であった。

TFの明度: N5.0

IFの明度: N2.5, N3.5, N4.5

統制刺激として, 一辺 60 mm の正方形で N5.0 の色紙を使用した。比較刺激として, N3.0-N7.0 まで 0.2 ステップで明るさを変化させた一辺 20 mm の色紙を, 1枚のケント紙に3つずつ添付したものをを使用した。

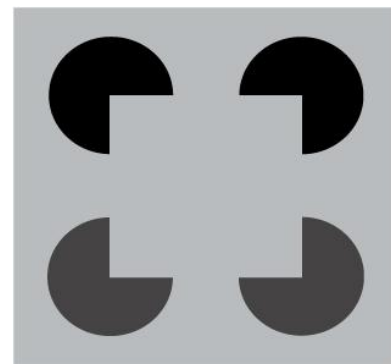


Figure 1. Kanizsa型主観的輪郭図形.

